

書評

看護介入分類(NIC)
原書第6版

- 監訳 中木高夫／黒田裕子
- 定価 本体 7500 円＋税
- 発行 エルゼビア・ジャパン／南江堂

評者

日本赤十字看護大学名誉教授
川嶋みどり

広範な看護介入項目を整理した NIC を学ぶための基本書

看護という営みは、把握した基礎データのアセスメントから、必要な看護介入事項を選択して実施し、その結果を評価するまでの一連のプロセスを辿って初めて、1行為が完結する。とすると、看護師の思考が最初のステップに留まりがちであることは、看護診断以前からの傾向であった。

それ故に、アイオワ大学の看護介入分類が紹介されたとき（原著第2版、2001年）、その人に必要かつ有用な介入を示唆する書であると期待した。ただ、あまりにも細分化された項目を概観して、これを現場で活用するまでの遠い道程に思いを馳せたのであった。これに先立つ NANDA-I の導入、普及の途上でも感じたが、日本の文化や伝統と馴染まない看護（行為）用語への違和感を禁じ得なかったことも記憶している。

その後、病院における医療情報のシステム化の進行とともに、NANDA-I ならびに、看護介入分類（NIC）、看護成果分類（NOC）が電子カルテシステムに組み込まれる職場が増えていて聞き、果たしてどのように活用されているかについても関心を持っていた。

研究的、実践的な検証で 担保された信頼性

今回、第6版の本書を手にし、多彩で多様かつ膨大な看護介入項目を整理し、7つのドメインと30のクラスに分類する作業に関わった20年間にわたる多くの研究者や団体のチームワークやコラボレーション、そして、経年的に加筆、修正、削除などの精練過程を経て膨大な成果物に至った労苦と、その継続性に対して、一種畏敬の念を持った次第である。

広範な看護介入を包括し、既存の実践に基づいて帰納的に集められた情報を基礎に、研究的、実践的な検証を経たという点からも、その信頼性が担保されてい

ることは申すまでもない。実践を抜きにはできない看護の本質から見ても、NICを網羅した本書の意義は限りなく大きいと思う。

「NICに関する質問」で 理解を助ける

だが、現在のわが国の看護事情から見てその活用は^{おぼつか}覚束ないのではないかとの思いもある。IT化の進行により、患者新入院時のアセスメントから始まるケアプランの作成、1日の看護業務の最終段階での電子カルテへの入力、現在の看護師の繁忙感や残業の一因となっている。穿った見方をすれば、NANDA-I と NIC、NOC がリンクされたパソコン上から、個別の患者に必要な項目を選択するのに手間取っていることがその主因かもしれないとさえ思う。

そこで、まず本書の第1章の「よく尋ねられるNICに関する質問」を熟読することをお勧めする。その上で、実践、教育、研究の各領域において、NICをどのように使用するかを理解すべきだろう。

課題としては、第3部に掲載されている膨大な看護介入分類を、日本の看護の現状に合わせて取捨選択し、実践との乖離を防ぐ方法の検討が求められる。いま1つ、現在の看護カリキュラムとの照合を図ることも、看護教育上の課題ではないだろうか。いずれにしても、分類という科学の方法は、“ひとまず定義することによってあくまでも対象を固定し、静的にとらえる方法”だという点からも、定義の命題を固定したり絶対視せず、個々の介入項目にある行動の重みづけ、複数の介入の組み合わせなどを討論することも、NICへの関心を高める方法となろう。

本書は、看護介入の範囲の広さや内容の多彩さを学ぶ書として、多面的に活用できると思う。